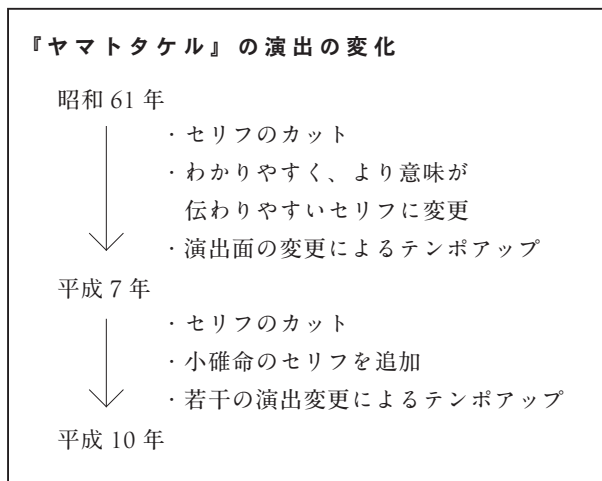


『ヤマトタケル』を語る

市川團子



皆様、本日はありがとうございます。祖父の映像と共にお話をさせていただくのははじめてなので緊張しておりますが、一生懸命務めさせていただきますので、どうぞよろしく願います。これまでヤマトタケル役は祖父を筆頭に中村信二郎さんや右團次さん、目乃助さん、猿之助さんがつとめられてきましたが、今回の台本は昭和61（1986）年、祖父が46歳のときに初演した『ヤマトタケル』に近い形で作られました。

そこでまず、これまでのすべての上演台本を読み、各公演の違いを知りました。次に映像を全部観て、その違いを実際に観る。そのうえで今回の台本を読み、それまでの公演のどの部分が使われているかを考えながら役作りをしました。本日は、それらを通して「今回の『ヤマトタケル』は、どこが初演に近いのか」について、お話しさせていただきたいと思います。

祖父は昭和61年、63（1988）年、平成7（1995）年、10（1998）年と4回、上演しましたが、大きく分けると昭和

61年と63年の演出は、ほとんど同じです。ところが平成7年にガラリと変え、10年はさらにそれを洗練させました。私は先輩から「初演というものはパワーがある」と教えていただきました。舞台は再演を重ねる度に洗練されていきますが、初演は、まだまだ洗練されていない部分が多く残っている。いわば原石の状態です。そして原石ならではの荒々しさが生むパワーのおもしろさもあります。ですから昭和61年、63年の公演をひと言で表せば、まさに「エネルギーが濃いザ・初演ヴァージョン」。平成7年は「大幅なブラッシュアップヴァージョン」。平成10年は「ヤマトタケルの心情に、より磨きがかかったヴァージョン」とタイトルを付けられると思います。今回は初演の昭和61年と再演の平成7年、そして令和6年の映像を観ながら、どこがどのように変わっていったのか、そして令和6年に私が出演させていただいた『ヤマトタケル』は、どこが初演に近いのかを比較検討してみようと思います。

1 兄橘姫、弟橘姫の早変わり

まず、見比べていただきたいのは、兄橘姫、弟橘姫、弟橘姫についてです。初演では中村福助さんが兄橘姫、弟橘姫を1人2役でつとめられておられましたが、平成7年からは兄橘姫を市川笑也さん、弟橘姫を春猿さんがつとめられました。それによる演出の違いをご覧ください。

（ここまでの簡単なあらすじ）

美しい兄橘姫・弟橘姫の姉妹がいると聞いた帝は、息子でひつぎの皇子の大碓命に2人を連れてくるように命じます。しかし大碓命は命に背いて兄橘姫を我がものとしたうえに、さらに姉が不在の隙に妹にもいい寄るのでした。

【映像昭和61年】

弟橘姫 恐ろしいことをなされました。帝の仰せで私たちを召しながら自らのものにされてしまうとは、恐ろしいことをなされます。

大碓命 花橘の色香に迷って、私はお前たち姉妹に命をかけてしまった。この上はどうしてもお前が欲しい。さあ、捕まえたぞ。さあ、捕まえたぞ。こうなればおまえは私のものだ。アハハハ。おい、おい、待て。

― 弟橘姫が柱の裏に隠れ、兄大碓命が探していると兄橘姫が現れる

兄橘姫 あなた、あなた様。

大碓命 お前は兄橘姫。使に行つたはずなのに。

兄橘姫 わが背子の君と妹と一緒にしておくのが心配で、そつと隠れて見ておりました。男はみな狼と聞いておりましたが、まさか、まさかと思つた愛し恋しの我が君は狼の中の狼、それもとりわけ性根の

悪い狼とは許しません。

大碓命 許せ、ほれ、許せ。

兄橘姫 何をなさるのでございます。

大碓命 ほれ、許せ、出来心じゃ（略）

― 大碓命に押されて兄橘姫が柱の裏に隠れる。続いて弟橘姫が現れる

弟橘姫 良いところに姉じやが帰つてきて、本当に助かりました。

【映像平成7年】

― 大碓命が弟橘姫にいい寄っている

兄橘姫 あなた、あなた様。

大碓命 そなたは兄橘姫。

弟橘姫 ああ。

兄橘姫 弟橘姫はまだ幼のうございます。ご無体なことをなされますな。一体、なぜそのように苛立つて

おいでなのでございますか。

大碓命 うるさい女子じゃ。

兄橘姫 あなたは帝様の仰せで私たちを召しながら、自らのものにされてしまわれた。そのうえ、このころは朝餉の式にもまいられず、帝様がなんと思召すか。私はそれが気がかりでなりませぬ。

このように平成7年からは兄橘姫と弟橘姫が同時に存在することが可能になりました。では大変、拙いですが、先日の私の映像をご覧ください。

【映像令和6年】

大碓命 弟橘姫、弟橘姫、さあ捕まえたぞ、さあ捕まえたぞ。これでお前は私のものだ。アハハ。これ、待て、待たぬか。

― 弟橘姫が逃げ、柱に隠れる

兄橘姫 あなた、あなた様。

― 兄橘姫が現れる

大碓命 お前は兄橘姫。使に行つたはずなのに。

兄橘姫 男は皆、狼と聞いておりましたが、愛しいわが背の君が、とりわけ性根の悪い狼とは。
大碓命 許せ、出来心だ。
兄橘姫 許しませぬ、許しませぬ。
大碓命 許せ、出来心だ。
―― 大碓命を兄橘姫が追ひ、柱の裏に入る。代わって弟橘姫が出てくる
弟橘姫 良いところに姉上がお戻りになられ、本当に助かりました。

今、ご覧いただいたように令和6年版は、一人二役で、初演に近いというのがおわかりいただけると思います。早替りのおもしろさという効果はもちろんのこと、双子の役を一人が演じることで双子の両面性も表すことができる演出だと思っています。

2 細かな演出面も初演に戻しているところがある

続いては照明に着目したいと思います。おおうすのみこと大碓命の双子の弟・小碓命（おおうすのみこと）が誤って兄を殺してしまったところを兄橘姫に見つかり、問い詰められるシーンです。ここでは次の場面に移り変わるまでの灯りの付き方に注目してください。

【映像昭和61年】

兄橘姫 返してください。私の夫を。返してください。

―― 兄橘姫が泣き崩れ、小碓命の顔をクローズアップするように照明が絞られ、そのまま次の場へ。ひざ

【映像平成7年】

まず小碓命の体に照明が広がり、全灯りが付くと帝や皇后などが居並ぶ「元の聖宮」の場面へ移る

兄橘姫 私の愛しいお方をお返してください。お返してください。

小碓命 大変なことをしてしまつた。だが、だが何としても兄上の凶りごとを隠さねば、隠さねば。

―― 泣き崩れる兄橘姫。立ち尽くす小碓命の照明がフェイドアウトし暗転。全員が居並ぶ「元の聖宮」場になり、灯りが付く

場面が切り替わる時、初演では小碓命に照明が当たり続けたのに対し、再演はセリフが追加され、一回、照明が切れたのがわかりましたでしょうか。祖父はこういう細かいところにも美意識を持ちブラッシュアップしていました。

【映像令和6年】

兄橘姫 私の夫をお返してください。私の夫をお返してください。

―― 兄橘姫が泣き崩れる。小碓命の顔をクローズアップするように照明が絞られる。そのままフェイドインで全灯りになると、ひざまずいた小碓命と帝や皇后などが居並ぶ「元の聖宮」になる

令和6年版は初演と同じように照明が当たり続けているのがおわかりいただけでしょうか。それにより小碓命の苦悩や次の場面に移るまでの感情の移り変わりが、より表現できると思います。

3 セリフは昭和61年版のカット版が多く採用されている

次にご覧いただくのは、2幕の「焼津」の火攻めの場面です。初演では3人がグダグダしているのですが、再演はスタイリッシュになっています。ここでは初演と今回のヴァージョンを見比べていただきます。

（ここまでの簡単なあらすじ）

熊襲征伐で勝利をおさめ、ヤマトタケルと名を改めた小碓命。しかし帝からは蝦夷征伐をいい渡され、従者タケヒコと向かいます。その途中、タケルを慕う弟橘姫が追いつき同行することに。3人が相模に著くと国造ヤイレボ・ヤイラム兄弟の策略にはまり、四方を火で囲まれ、火攻めに遭うのです。

【映像昭和61年】

弟橘姫 どうせ死ぬなら一緒に死にとうございます。しっかりと抱いてくださいませ。

タケヒコ こんなときに二人ともなんということを。何かご工夫はありませんか。

小碓命 そうだ、やらねばならぬことがたくさんある。どうしてもこの火の中から逃れ出なくてはいけないのだ。

【映像令和6年】

弟橘姫 どうせ死ぬならあなたに抱かれて死にとうございます。しっかりと抱いてくださいませ。

タケヒコ こんなときに悠長なことを。あなたは死んではいけない。何か助かるご工夫はありませんか。

小碓命 そうだ、そうだ。死んではいけない。死んではいけない。やらねばならぬことがたくさんある。

平成7年版では、タケルと弟姫が抱き合い、タケヒコが割って入るというくだりごとカットされていますが、今回はこのように初演に近い演出となりました。

その後、舞台は火の中の立廻りになります。私は花道で見得を切ったのですが、これは初演と今年しか行っていないません。花道では、敵の火を追いつ込む振り付けがされており、火の立廻りの迫力がより感じられる演出になっています。いろいろ研究してみると祖父の繊細な演出は、セリフの終わり方にも現れていることがわかります。今からご覧いただく映像はヤイレボ、ヤイラム兄弟を倒した後、タケルが葛藤しながら自分の思いを吐露する場面です。ぜひ幕切のセリフにご注目ください。

【映像昭和61年】

タケル 我らの定めは火だ。我らは火のように燃えて、そして灰になって消えてゆくのだ。

タケヒコ 不吉なことをおっしゃいますな。

タケル 人間の運命とはそういうものだ。ふっハハハ。

— 音楽が大きくなり、タケルに照明が当たったまま、ゆっくりと暗転

【映像平成7年】

タケル 我らの定めは火だ。我らは火のように燃えて、そして煙となって消えてゆくのだ。

— 音楽が大きくなり、タケルに照明が当たったまま、ゆっくりと暗転

【映像令和6年】

タケル 我らの定めは火だ。我らは火のように燃えて、そして灰となって消えてゆくのだ。

タケヒコ 不吉なことをおっしゃいますな。

タケル 人間の運命とは、そういうものだ。ふっハハハ。

— 音楽が大きくなり、タケルに照明が当たったまま、ゆっくりと暗転

再演ではタケルとタケヒコとのセリフが1つずつカットされ、スッキリと洗練された印象になりました。不敵な笑みをしながら幕が切れるのと、かつこいセリフで切れるのは、どちらもよさがありますが、私は前者のほうが好きだなと思っています。そして私が『ヤマトタケル』のセリフの中で一番好きなのは最後、白鳥になってからいう「よくわからぬ」というセリフですが、これは私の中で殿堂入りをしています。それ以外ですとこの場面のセリフが一番好きです。

続いてご覧いただくのは蝦夷征伐の後、船で戻る途中、海が荒れて船が揺れる「走水」の場面です。現在は船が回るのみですが、初演では、これまでタケルが倒してきた熊襲タケルや相模のヤイレボ、ヤイラム兄弟の亡霊が海上に出てきました。平成7年からは亡霊は出さず、海が荒れた理由を海の神の怒りとしています。今年は、亡霊は出せんでしたが、初演の流れを踏襲して「これまでミコトが殺した方の祟りです」と占い師・トスタリがいう演出となっていました。

次は、弟姫が海に飛び込んだ後のタケルのセリフについてです。ここでは主に伝えたいことをよりわかりやすく伝えるためにブラッシュアップが行われていることがわかります。どのように変わっているかをご覧ください。

（こままでの簡単なあらすじ）

嵐を鎮めるには海の神にタケルが一番大切なもの―弟橘姫を捧げなくてはいけないという占い師の言葉により、弟橘姫は自ら荒れ狂う海に入水する。

【映像昭和61年】

タケル

わしは失った。わしは一番、大切なものを失った。なぜ、なぜ、一緒に海へ飛びこまなんだのだ。なぜ、なぜ、共に海底へまいらなんだのだ。俺は悔しい。俺は卑怯者だ。俺はいくじなした。俺は、生きる価値のない男だ。

【映像平成7年】

タケル

わしは失うた。わしは最も大切なものを失うた。私は一体、何のために戦い、何を求めて旅をしているのか。最も愛するものを失ってまで、私のしていることはなんなのだ。私のしていることは、なんなのだ。

悲壮感がより伝わるように、初演は「自暴自棄」、再演では「人生の目的を自問自答する」というセリフが変わっています。

さらに同じセリフの比較として初演と再演それぞれの特徴がよく出ている場面をご覧ください。帝の命で大和へ帰るタケルは最後、伊吹山の山神の化身・白猪と戦います。

【映像昭和61年】

タケル

最前の猪はお前か。

山 神

そうじゃ。わしじゃ。お前はあのととき、わしを殺せばよかったのだ。

タケル

どっちにしても同じことだ。お前が今日、死ぬことは前世の定めだ。

山 神

たとえ死んでも変わらずお前を道連れにしてやる。今日、ここでお前が死ぬことも前世の定めで決まっていることだ。いくぞ！

【映像平成7年】

タケル

最前の猪はおのれか。

山 神

そうだ、わしだ。お前はあのととき、己の策におぼれ、わしをわざと取り逃した。殺しておけばよかったものを。

タケル どちらにしても同じことだ。おのれが今日、死ぬるに変わりはないのじゃ。
山 神 いや、お前の負けじゃ。お前はその上、己の力を過信して大切な剣を手放した。お前は今日、この伊吹の山で死ぬのじゃ。ゆくぞー！

作品の大きなテーマである「傲慢」について、再演ではこの場面で山神が言及するようになっていきます。それを踏まえたうえで今年の映像を観ていただきたいと思います。

【映像令和6年】

タケル 最前の猪はお前か。

山 神 そうじゃ、わしじゃ。お前はあるとき、わしを殺しておけばよかったのじゃ。

どっちにしても同じことだ。お前が今日、死ぬことは前世の定めだ。ゆくぞー！

― 戦う

今回の上演が初演に近いということが、わかったと思います。

そして、セリフの変化として最も重要なのは3幕の「能^の煩^{わづ}野の道」です。

〈ここまでの簡単なあらすじ〉

山神と戦ったタケルは大和へと急ぎますが、病に侵され足が鳥のように曲がり、思うように前に進めなくなります。

【映像昭和61年】

タケル わしは時々、思うことがある。わしは元々この世の人ではないのかもしれないかもしれぬと。わしから見れば、この世の多くの人々はこの世にしっかりと足をつけて生きているように思われる。この世の富と名声

を追いかけて疑おうとはしていない。しかし、私は違う。私は子供のときから、富と名誉というものにあまり関心がなかった。私は、普通の人々が追わぬものを必死に追いかけたような気がする。それは何かよくわからぬ。何か途方もない、大きなものを追い求めて、私の心は絶えず、天高く天翔けていた。その、天翔ける心から私は多くのことをした。天翔ける心、それがこの私だ。

おわかりいただけでしょうか。『ヤマトタケル』で有名な「天翔ける心、それがこの私だ」のセリフ。じつは初演では、この能煩野の道のシーンでいっていたのです。これを平成7年からはラストに持っていきました。また最後の民家のシーンでは「山神が申しておった。己の力に過信したものは負けじゃ」というセリフも加わり、テーマである「傲慢」について、さらに触れています。一方、初演も今年も最後の民家のシーンでは「傲慢」について触れていません。続いてタケルが亡くなる場面の違いもご覧ください。

【映像昭和61年】

― 兄橘姫とワカタケルがかけつける

タケル あの倭姫さまから賜ったあの剣、あれがあれば、あれがあれば。

― タケルが倒れる

【映像平成7年】

タケル 私の霊はすでに雲になって天に昇っているのだ。

― タケルが倒れる

タケル そうだ、この雲に身を委ねれば、私は再び広い大空へ駆け巡り、西や東の国々を旅することができよう。天高く、高く高く昇っていくことができる。この雲にのって、あの峠を一つ越せば大和の国だ。

懐かしい。懐かしい私の大和の国だ。大和は国のまほろば。大和へー、大和へー。
― こと切れる

【映像令和6年】

タケル あ劍さえあれば伊吹の山の神に負けずにすんだものを。あれがあれば。あれがあれば、あれがあれば……
― こと切れる

令和6年版は、初演に近い形であるということがわかりただけたと思います。

最後は、タケルが白鳥となりいう、ラストのセリフが初演と平成7年版で、どう変わったかをご覧ください。

【映像昭和61年】

タケル さようなら兄姫、さようならワカタケル。さようならタケヒコ。帝さま、倭姫さま、みやす姫、さようなら。兄上、弟姫、もうすぐそちへ行くぞ。ヤイレボ、ヤイラム、クマソタケル、もうすぐそちへ行くぞ。そちでまた会おう。また、戦おう。

― 音楽が大きくなり、天に上る

【映像平成7年】

タケル さようなら兄姫、さようならワカタケル。さようならヘタルベ、さようならタケヒコ。帝さま、倭姫さま、みやす姫、さようなら。兄上、弟姫、もうすぐそちへ参るぞ。そちらでまた会おう。また、まみえよう。思えば、この世の多くの人々は富と名声を追いかけて疑おうとはしていない。しかし、私はあまりそのようなものには関心がなかった。私は幼い頃から、普通の人々

が追わぬものを必死に追いかけたような気がする。それは何か、よくわからぬ。何か途方もない大きなものを追い求めて、私の心は絶えず天高く天翔けていた。その天翔ける心から、私は多くのことをした。天翔ける心。それがこの私だ。

ラストのセリフはこのように変わりました。今年が初演、再演、どちらも取り入れ、「戦おう」も「天翔ける心。それがこの私だ」も入っています。監修くださった石川耕士さんが編集してくださり、全部を取り入れたヴァージョンにしてくださいました。そういう意味では今年の『ヤマトタケル』は初演に近い形になっていますが、平成7年版を踏襲しているところもあります。

やはり、「天翔ける心」のセリフが最後のシーンにくることによって、より作品のテーマ性が表現される演出になっていると思います。

最後に少しか私の役作りについてお話ししたいと思います。初演とは同じ場合は何度も映像を観て感覚を覚えしました。一方で初演とまったく違う場合はどうするかというと、たとえば熊襲との立廻りの振り付けは猿之助さんがされた平成24(2012)年の立廻りとはほぼ同じです。祖父は京劇の手法も取り入れているので、今回とは少し振りが違うんです。そういうときはそれぞれの共通点、たとえば祖父の振り付けが「2回除けて飛ぶ」で、私の振り付けが「2回刀で切って飛ぶ」ならば、2つ動作をしてから飛ぶという共通性があるので、祖父の「2回除けて飛ぶ」のリズムを私の「2回刀で切って飛ぶ」の振り付けに取り入れました。こうやって解釈をし、練習をしました。

というわけで本日は、今回の『ヤマトタケル』がなぜ初演に近いといえるのかということについてお話しさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。